

こんにちは。ゆいの林です。8月23(土)・24日(日)の2日間で「自閉症カンファレンスNOPPON 2014」に参加してきました。

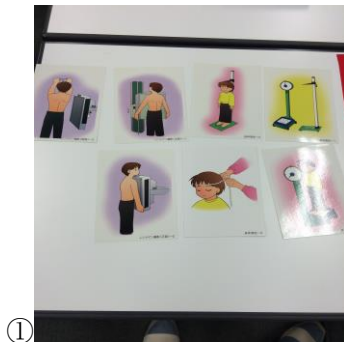
1日目は、ゲーリー・メジボフ氏による「ASDの人への高等教育・大学進学前後への支援」、「生涯を通じた社会へのかかわり」という講演でした。米国の研究では、ASDの人の中で33%程が(カリキュラムの一部のコース履修含む)大学へ進学する」という結果が近年の先行研究であげられていること。その背景として、障がいをもつ人を対象とした各分野の専門家のいる窓口(ディスアビリティ・オフィス)を設



置・活用し、個別の必要なニーズに対応していく体制が必要であること。とりわけ入学前後のサポートが最も重要で、合理的な配慮、カリキュラムコースの選択、特別な研究室の割り当て等を早い段階から準備する必要があること等を話されていました。アメリカ障害法では障がいのある人が十分に各プログラムに参加できるように環境を変更、または調整する機能を果たせるように法的根拠を有しているそうです。

少し固めのお話をしてしまいましたが、それらを支えるのは紛れもなく関わる周囲のASD特性の理解でした。概念や事実の理解は得意でも、推測・言葉・概念の裏を読むのは苦手です。情報処理に時間を要したり、講義を聴きながらメモを取ったりするのも大変なケースもあります。スポットライトがあたり細部に注目し過ぎて、大事な部分が抜け落ちてしまう場合も少なくありません。それらの部分をサポートしてくれる存在とネットワークが今後のASDの方々を支えていくのに非常に重要であることを教えて頂きました。

サブプログラムの「コミュニケーション機器ルーム」「医療ルーム」という企画では健康診断や歯磨きの際に使用する視覚的ツール(①、②)、生活スケジュール(③)等、実際日々の支援で用いられている魅力的なものを拝見させていただきました。特に面白かったのは、ご本人が好きなドラゴンボールをデザイン活用し、トークンツール(④)に使用するアイデアで、とても感銘を受けました(一部掲載)。



①



②



③



④

2日目は、アクティビティシステムに関するプログラムを受講しました。個別で学習スタイルが異なるからこそ、個別の準備と対応が重要。視点として強みや長所を伸ばすことが必要になってきます。温痛覚、触覚、視覚等の感覚刺激のキャッチにも偏りがあるため、これらの配慮が欠かせないことを再認識できました。構造化という手段をもって「どのように教えるか(伝えるか)」、ご本人に合う、刺激整理された生活・環境を設定することで、豊かさや自己肯定感を育むことができることを学びました。

両日通しての最後のフィナーレは、ゲーリー・メジボフ氏による「コアバリュー」についての講義でした。コアバリューとは、中心的な価値と訳せますが、メジボフ氏の言うそれは、「支援者が ASD の方々を支援する上で大切にしたい価値観」というものでした。それは「自閉症を理解すること」「常に最高を目指す」「必要なことを実践する」「協力と協働」「正直であること」「状況を肯定的にみること」「共感」「尊敬と謙遜」等、これらのコアバリューに関わる人々の成熟(日常活動の中での振る舞いや考え)を促すこと。ASD の理解と文化を知ること(良悪ではなく、違っているということを知る)は、社会が多様性である必要があることが自ずと見えてくる、ということをお話されました。

本研修では、「今後、支援者として自分がどのように成長していくべきか」を考える貴重な機会となりました。今後の業務や支援の動機付けとして、活かしていきたいと思います。

最後に「～価値あるものは続く～」、ゲーリー・メジボフ氏による素敵なお言葉でした。